



聖ニコライの肖像

宣教師ニコライ

ロシア正教、日本へ②

キリスト教が西方教会と東方教会に分裂し、たのは一〇五四年。ユダヤ教を離れ、キリス

トの直弟子の十二使徒を中心にキリスト教として初代教会が誕生したが、迫害の時代が続く。しかしローマ帝国

国で国に認められ、大分は広大な帝国の全土に広がった。そのため、イエス

サビエル生誕五百年

巡礼の道

368

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

の教えの解釈などをめぐっているという食い違いが始め、各地から代表が集まり「公会議」なるものが開催される。第一回は三二五年、ローマ皇帝コンスタンチヌス一世によってトルコのニカイアに招集された。その後も何回か公会議はトルコで開かれていたが、その国が今はイスラム国になっているのはなぜなのだろうかという気持ちになる。

一五四九年のキリスト教の日本伝来。この時伝えられたのは西方教会のキリスト教で、東方教会はロシア正教の司祭、ニコライ・カサートキンによる一八六一年とされている。実はその三年前の一八五八年に日露修好通商条約が結ばれ、函館に領事館が設置された。その際、領事とともにマーホフという司祭が来日した。ロシア正教はロシア帝国の国教であり、司祭は随員として同行することが義務づけられていた。しかしマーホフは病気で二年後には帰国し、日本にロシア正教が影響を与えることはなかった。

十五歳のニコライ・カサートキンである。彼は領事の期待に応え、聖書や祈とう書を日本語に翻訳し、明治六年（一八七三）にキリスト教禁止令が廃止されるとロシア正教の布教に努め、一九一二年に七十五歳で帰天するまで活動した。その活動がいかに精神的であったかは、日本人の信徒数に表れている。明治二十一年（一八九八）の内務省の調査によると、カトリック信徒五万三千九百二十四人、ロシア正教徒二万五千二百三十一人、次いでプロテスタント各派となっており、短期間に大勢の信徒が誕生したことがわかる。彼は一九七〇年に「聖人」とされた。ロシア正教の日本発祥の地が函館だったこともあり、教会は東日本に多い。函館の教会を訪ねたことがある

が、東京のニコライ堂同様、カトリックの教会とは少し雰囲気が異なる。現在はロシア正教ではなく、日本正教と呼ばれて三つの教区に分けられている。東日本教区が三十二教会、東京教区がニコライ堂など十七教会、西日本教区が十二教会、あわせて六十一教会ある。なお、ニコライは東

京のニコライ堂を建設する際、ロシアに帰国して資金集めをしたが、彼の活動に関心を持った文豪、ドストエフスキーと会ったという記録も残されている。我々はキリスト教伝来といえば西方教会のフランシスコ・サビエルを連想するが、東方教会のニコライ・カサートキンも忘れてはならない人である。



発祥の地、函館の教会